

八郎潟干拓地における社会関係の評価に関する基礎的研究 —社会ネットワーク分析を用いて—

A Fundamental Study on Evaluation of Social Relations in Hachirogata Reclaimed Land: Using Social Network Analysis

氏名 栗原 良樹 指導教員名 中島 正裕

1. はじめに

戦後の食料増産という国家的戦略により国営干拓事業が全国各所(388 か所)で実施された。そのなかで最大の定住型干拓地である秋田県八郎潟干拓地(以下、大潟村)は、大規模農業経営を行う「モデル農村」として 1964 年に誕生した。大潟村は全国から入植農家が集まり、地縁・血縁のないなかで、「ゼロ」から社会関係を構築されていった。

2014 年で生誕 50 周年を迎えるという状況において、非農家と共存する混住化社会のあり方が問われている。しかし、同村における先行研究¹⁾²⁾³⁾では非農家を含めた社会関係の形成過程および構造は解明されていない。そこで、本研究では個人レベルでの社会関係に着目し、非農家を含めた大潟村の社会関係の形成過程および構造を解明することで、今後の混住化社会の成熟に向けた基礎的研究と位置付ける。

2. 研究方法

本研究では、大潟村に居住する農家 7 名、非農家 9 名を対象にヒアリング調査を行い、入植・入村の歴史および現在までの社会関係の変化を個人レベルで明らかにする(3 章)。ついで、農家 10 名、非農家 13 名を対象に「社会ネットワーク分析」(Social Network Analysis, 以下 SNA)^{*1}を行い、現在の社会関係を解明する(4・5 章)。具体的には 23 名の対象者に「日常的に行き来し、よく話している相手」5 名以内を挙げてもらい、その属性や関係など分析する。なお、実際の分析には「UCINET 6」を用いる。

3. 入植・入村の歴史と社会関係

3.1 入植・入村の史的整理

農家は入植事業により 1967~1974 年の間に 5 回に分けて、計 560 名が入植しており、農家のみの住区に居住している。非農家は、役場職員、会社員、商店街の住民などが存在する。役場職員らは毎年の若干名の採用によって、村外で働いている住民は住宅の価格が安いなどの理由で入村し、

混住区に居住している。商店街の住民は、8 店舗が 1974・1975 年に入村し、商店街に居住している。

3.2 大潟村における社会関係の分類

大潟村における社会関係には、表 1 にある 6 種類に分類できることが明らかになった。

4. 非農家のもつ社会関係

4.1 全体的傾向

(1) ヒアリング結果

非農家が農家と交流するには、サークルの活動時間が非農家の仕事時間である平日の日中が多いことや、農家の知り合いがいないため参加しにくいことなど障害が多い。

商店街の住民は、店を通して大潟村へ溶け込み、常連客からサークルに誘われたり、一緒にサークルを立ち上げたりし、農家と共に活動をしている。

役場職員らは職場・業務を通じて交流を広げるも、「サークル」・「子供」によって交流している。

一方、村外勤務の場合は村内に関係を築くことは難しく、村外にて関係を構築している。

(2) SNA 結果

SNA 結果を属性区分別に、ネットワーク指標^{*2}、挙げられている「相手」の属性、「相手」との関係の 3 つの観点から示した(表 2)。

商店街の住民は、ほとんど農家(3.50)が挙げられ、全て「サークル」つながり(4.00)となっている。密度が比較的高く(0.67)、サークルを通じて農家と密な関係を築いている。

非農家男性・女性はともに農家が多く(3.00, 4.00)挙げられており、その交流は「仕事」・「子供」・「サークル」を通じたものである。男性は「仕事」(2.25)、女性は「子供」(2.00)を通じた交流

表 1: 大潟村における社会関係

仕事	農業生産に係る関係、職場における関係
子供	PTA・子供の部活動を通じた親同士の関係
自治組織	青年会や婦人会など自治組織における関係
サークル	趣味の会・県人会などにおける関係
村内近隣	大潟村内での幼馴染や近隣住民との関係
村外	大潟村外での関係

が多くされている。男性の媒介中心性は高く(0.81), 様々な集団に参加していると考えられる。

4.2 個人の一例

(1) ヒアリング結果

学校教員であるA氏(54歳, 女性)を事例として取り上げる。A氏は隣町に住んでいたが, 共働きで夫婦の勤務地の中間地点であることから, 1989年に夫・子供と共に混住区の村営住宅に入居した。

住区活動に参加することで交流の範囲を広げているが, サークルは活動時間が仕事時間と重なるため参加することができない。一方で, 子供の部活を通じて親同士の交流へ発展し, 子供が卒業した現在でも, 親の会として定期的に集まっている。メンバーとは「家族構成が似ているから, 子供への悩みどころが似ているため話が合う」という。

(2) SNA 結果

SNAを用いた現在のA氏の社会ネットワーク図を図1に示した。挙げられているのは農家(4.00)がほと

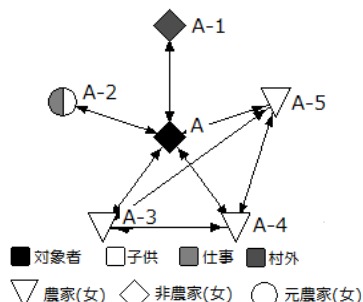


図1: A氏の持つ社会関係

んどで, その関係は「子供」(3.50)が多く, 子供を通じて農家と交流をしている。「仕事」(0.50)や「村外」(1.00)といった関係が「子供」とは別で構築されており, 「村外」もしくは「仕事」を精神的な拠り所としていると考えられる。

5. 農家のもつ社会関係

大潟村で育った入植2世は同級生や青年会・若妻会などを通じて広い社会関係を持っている。そのうえで, 営農方針が合う農家との販売組織や, 趣味が合う仲間とのサークル活動が行われている。一方, 婿や嫁として入村した農家2世は子供関係や自治組織を通じて交流を広げている。以上のこ

とがヒアリングにより明らかになった。

一方, SNA結果(表2)からは以下のことが明らかになった。非農家は挙げられておらず(0.00), 農家は農家と交流している。そのなかで農家男性は「仕事」を通じた交流が多い(0.95)が, 次数が低く(2.57)交流全体としては活発でない。しかし, 相手との関係が6種類すべてに広がっており, 様々な関係を構築している。農家女性は「村内近隣」(1.21)・「自治組織」(0.96)といった地縁的なつながりができており, 特に「子供」(1.74)を通じた交流を構築している。

6. まとめ

本研究では定性的・定量的側面から非農家を含めた社会関係の形成過程と構造を解明した。

農家の多くが世代交代(入植2世)した現在でも全体的には依然として農家・非農家間の「活動時間・話題が合わない」などの“壁”が存在している。実際に, 農家同士では「村内近隣」といった地縁的な関係が構築されているが, そのなかに非農家は含まれていない。一方, 個人レベルでは「子供」・「サークル」などを通じて交流があることから, それらは“壁”を越えた農家・非農家の関係の構築・維持に影響を与えていると考えられる。

注釈

※1 「社会ネットワーク分析」とは社会関係をネットワークとして構造的に分析を行う手法である。

※2 「次数」は0~5の値をとり, 値が大きいほど交流が多いことを表す。「密度」は0~1の値をとり, 値が大きいほど似た相手たちと強固繋がっていることを表す。「媒介中心性」は0~1の値をとり, 値が大きいほど集団と集団の橋渡しの役割が大きいことを表す。

参考文献

- 地域コミュニケーション研究会(1975):「大潟村の地域特性とコミュニケーション(1)一大潟村の社会構造一」『国民生活研究』15(2), 1-25
- 地域コミュニケーション研究会(1975):「大潟村の地域特性とコミュニケーション(2)一大潟村の意識とコミュニケーション一」『国民生活研究』15(3), 1-23
- 松岡昌則(1991):『現代農村の生活互助—生活協同と地域社会関係—』御茶の水書房

表2: SNAの結果

属性区分	ネットワーク指標			「相手」の属性(人)			「相手」との関係(人)					
	次数	密度	媒介中心性	農家	非農家	村外	仕事	子供	自治組織	村内近隣	サークル	村外
商店街	4	0.67	0.33	3.5	0.5	0	0	0	0	0	4	0
非農家男性	4.25	0.19	0.81	3	0.75	0.5	2.25	0.5	0	0.5	1	0
非農家女性	5	0.45	0.55	4	0.5	0.5	1.25	2	0	0	1.25	0.5
農家男性	2.57	0.74	0.24	2.29	0	0.29	0.95	0.21	0.33	0.31	0.62	0.14
農家女性	4.83	0.39	0.59	4.17	0	0.67	0	1.74	0.96	1.21	0.6	0.33